21号のクリエイターはどんな人？

今回の表紙と特集は、enocoニュースレターのデザインに07号から関わってきた人が担当してくれてん。美術家で、こどもアート学科の講師もしてるらしいわ。どんな活動してるんか、ちょっと聞いてくるわ。

「問合いの良さ―コレクション考察―」展
チラシ（2018）

《WC190207》紙に水彩、額（2019）
表紙作品：《BC190426》セラミック（2019）

小池 一馬 さん

美術家、グラフィックデザイナーとして活動。enocoの隣にあるフラッグスタジオを拠点に活動するDECOBOCOのプログラムディレクター、「enocoの学校こどもアート学科」の講師も勤める。2020年1月24日~2月22日、大阪市南堀江にあるTEZUKAYAMA Galleryで個展を開催。
http://kazumakoike.com/（美術） https://kazumakoike-design.tumblr.com/（デザイン）

―― **インパクトのある表紙やなぁ。これクマなん？**

小池　異なる場所/時代に由来する偶像のイメージをミックスして、手クセで仕上げたセラミック製の彫刻です。明確にコレというのはないのですが、クマという意見が多かったので、私もクマと呼んでいます（笑）。表紙の手書き文字は、enocoスタッフのみなさんに、この作品で対話型鑑賞をしてもらって出てきたコメントです。

―― **好き勝手言うとるけど、作者としてはどうなん？**

小池　美術鑑賞をする時に、作者の制作意図を知ろうとすることはもちろん大事だと思うのですが、自分の作品に関しては、色々想像しながら長い時間見てもらえたら嬉しいですね。

―― **彫刻以外に絵も描いたりしてるん？**

小池　はい。紙に水彩や、キャンバスにアクリル絵の具といった絵画作品も作っています。

―― **このチラシはenocoの展覧会のやな。**

小池　これは昨年の「大阪府20世紀美術コレクション展」のチラシです。他にも「enocoおしゃべり美術館展」や「えのこdeマルシェ」のチラシ、「enocoの学校こどもアート学科」の講師も担当しています。

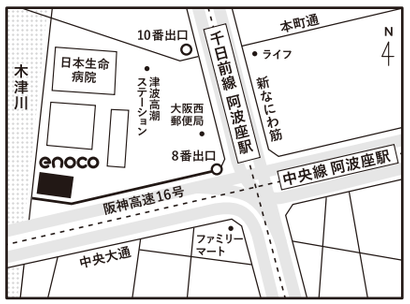
―― **マルチに活動してるんやなぁ。今度わしの彫刻も作ってや。**

enokojima creates osaka enoco

大阪府立江之子島文化芸術創造センター［enoco］
Enokojima Art, Culture and Creative Center, Osaka Prefecture

アートやデザインの創造力で、都市を元気にすることを目指し2012年4月にオープン。展示室や多目的室のレンタル事業を行うほか、企画展や公演、セミナー・ワークショップなどを開催し、クリエイティブな人や情報が行き交うプラットフォームとなることを目指しています。

〒550-0006　大阪市西区江之子島2丁目1番34号
開館時間：10:00～21:00（ただし展示室は催しによりオープン時間が異なります）
月曜・年末年始（12月29日～1月3日）休館
電　話　06-6441-8050｜FAX　06-6441-8151
メール　art@enokojima-art.jp
www.enokojima-art.jp



［アクセス］
地下鉄（Osaka Metro）千日前線・中央線「阿波座駅」下車、8番出口から西へ約150m。徒歩約3分。

enocoニュースレター 21　2020年1月発行
｜発行｜大阪府立江之子島文化芸術創造センター
｜編集｜高坂玲子、山本佳奈子、吉原和音（enoco 企画部門）
｜表紙・特集ページデザイン｜小池一馬
｜イラスト（エノケン、似顔絵）｜タダユキヒロ
｜アートディレクション｜後藤哲也（OOO Projects）
｜デザイン｜小池一馬（OOO Projects）

「enocoニュースレター」は、enocoが年2回発行する情報誌。
enocoで起こっていることや、enocoにかかわる人々が日々考えていることをお伝えしていきます。

enoco 21

クマ・人間の顔
↘
マスク（お面）
みたい
↙
かぶったら
神様!?

目がうずまいている
つりあがっている
→
怒りくるってる
キメ顔
↙
緊張してる？

そもそも
感情はある？

顔が2つある？

軽そう
↓
指のあとが
張り子のよう
↓
内部は
空っぽかも！

ふくらんでる？
へこんでる？

大阪府20世紀美術コレクションの活用形

出張展示と対話型鑑賞

江之子島文化芸術創造センター/enocoが送りする「enocoニュースレター」。表紙と巻頭は、毎号異なる関西のクリエイターたちが担当します。今回の特集では、enocoのコレクション活用の近年の取り組みについてご紹介します。表紙は、美術家で、デザイナーとしても活躍されている小池一馬さんの作品を、enocoスタッフが鑑賞した時に飛び出た言葉を配置したデザインに。皆さんもぜひ鑑賞してみてください。

21号の表紙・特集 デザイン｜小池一馬

www.enokojima-art.jp/

大阪府20世紀美術コレクションの活用形 出張展示と対話型鑑賞

大阪府は「大阪府20世紀美術コレクション」として国内外の20世紀後半に生まれた美術作品を中心に約7,900点におよぶ美術作品を収蔵しています。enocoはその管理と活用を担っており、年に数回、テーマに沿った展覧会を企画し作品を公開するとともに、展覧会といった形式にとどまらないコレクションの活用に取り組んでいます（例:演劇とのコラボレーションなど［enocoニュースレター03を参照］）。
今回の特集では、2016年度よりスタートした学校等への出張型展示事業「コレクション・キャラバン」を中心に、コレクションとその活用事業についてご紹介します。

「みる」体験のデザインとして コレクション×対話型鑑賞

大阪府は現代美術館設立の構想に基づき、1970年代から作品収集を行なってきました。関西の作家を中心とする作品、国際公募展「大阪トリエンナーレ」（1990～2001）の受賞作品など約7,900点のコレクションを有しています。しかし、美術館設立の構想が2001年に廃止決定されたことにより収集はストップ。その後は作品の管理・活用を行なっており、2012年からはenocoが管理・活用を引き継いでいます。従来の美術館と同様、作品の維持管理や保存を行なうとともに、展示公開も担っています。ただ、enocoには常設展示室がないため、時代や場所、ニーズに即した新たなコレクション活用方法の考案と実践が必要です。

そのひとつとして、外部での展示や作品貸出があります。enocoは「府立」の施設ですが、大阪府は縦に長く、府県の境界に近い地域とenocoは「近い」とは言えません。そこで次世代を担う子供たちに「大阪府はこんな美術作品を持っているんだ」ということを知ってもらい、親しんでもらえる機会を提供しようと府内の学校への出張展示を行なっています。
45分間という限られた授業時間（小学校の場合）の中で、いかに、今ここにある・今ここでしか見られない作品を、じっくり「みる」体験をデザインするかを考えた時、日常的に用いる言葉で、体験を共有する「対話型鑑賞」に可能性を感じ、これを軸として実践しています。また、「実物がある」、「それを現場に持っていくことができる」という強みは、教育現場のニーズである「実物作品の鑑賞体験」にも対応できます。加えて、鑑賞の場に美術の専門家であるenocoスタッフが加わることにより、多角的に子供たちの創造性を刺激する体験の場づくりを検証・更新することができます。enocoと教育現場、双方にとっての実験が進んでいます。

事業実績

コレクション・キャラバン
（2016年度～／年5校）

2016年度より開始した、学校でコレクション（実物）を出張展示する事業。大阪府内の小・中・高校、支援学校を対象として年間5校を公募で選定している。1～2コマの授業時間がベースとなるため、対話型鑑賞を軸としながら作品や美術に対する見方や感じ方を広げる／深めることを目標としている。

enocoおしゃべり美術館
（2018年度～／年1回）

「コレクション・キャラバン」で蓄積した経験とノウハウを活かしたコレクション展。会場内での会話・対話を終日OKとし、鑑賞者間の対話を引き出すような作品選定を行なっている。対話を促す仕掛けとして対話型鑑賞イベントを開催するほか、模写キットや鑑賞シートも用意し、随時掲示していくことで、様々な視点から作品をみることができるようにしている。

enocoおしゃべりパーラー
（2018年度～／定期開催中）

enocoのカフェスペースで、ティータイムとおしゃべりを楽しみながら作品を鑑賞するプログラム。対象年齢を制限していないため、子供や大人だけでなく親子でも気軽に参加できることから、美術鑑賞デビューの場としても活用することができる。

対話型鑑賞とは

美術史等の知識だけに偏らず、鑑賞者同士のコミュニケーションを通して作品を読み解いていく鑑賞方法。1991年ニューヨーク近代美術館（MoMA）で、アートを通じて鑑賞者・学習者の「観察力」「批判的思考力」「コミュニケーション力」を育成する対話型の鑑賞教育プログラムが研究開発され、その後、ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ（Visual Thinking Strategies）として発展・確立され全世界に普及。関西では、2004年よりMoMAのプログラムを源流とし、京都造形芸術大学アートプロデュース学科の講義として始められた「みる・考える・話す・聴く」の4つを基本とした対話型鑑賞プログラムACOP/エイコップ（Art Communication Project）を活用した取り組み等が行なわれている。近年では、美術館や学校だけでなく、企業や行政、NPO等からのニーズも高まっている。

大阪府20世紀美術コレクション

収蔵作品は、絵画が全体の半数以上を占め、次に写真、版画の順になっている。大きく分類すると、戦後関西を拠点に活躍した現代美術作家の作品を中心に収集した「関西の現代作家コレクション」、1990年から2001年まで開催していた国際公募展の受賞作品を中心とした「世界の現代美術（大阪トリエンナーレコレクション他）」、「現代版画コレクション」、1990年に大阪・鶴見緑地で開催された「国際花と緑の博覧会」に出品され開催後に寄贈を受けた作品や、関西で活躍した写真家より寄贈を受け収集した「現代写真コレクション」、1992年のセリビア万博で展示されたサイエンスアートや陶磁器、書やポスターなど、多岐にわたる作品が収蔵されている。

関西の現代作家コレクション
上前智祐
《縫立体（紫）》
1986年

関西の現代作家コレクション
津高和一
《向》
1987年

大阪トリエンナーレ
ヤノベケンジ
《アトム・スーツ・プロジェクト-大地のアンテナ-》
2000年

現代版画コレクション
前田藤四郎
《時計》
1932年

現代写真コレクション
エドワード・ウェストン
《ピーマンNo.30》
1930年

その他
田中一光
《Nihon Buyo UCLA》
1981年

©Ikko Tanaka 1981／licensed by DNPartcom

実際に取り組んでいる対話型鑑賞プログラムのプロセスを3段階に分けて、作品とともに紹介します。

1 様々な角度から複数人で同時に「みる」ことで、すみずみまで観察し、1つではない見え方や捉え方があることに気づく。

固くて、重そう。

上からみたら表は**ツブツブざらざら**。下からみたら裏側は**ツルツル**。

明るい赤色。凸凹部分はシルバーだ。

色がシルバーだから**金属**かなぁって。赤色はテカテカしているから塗っていると思う。

すべり台。生肉っぽい。**タコさんウインナー。明太子。**女の人の靴（ハイヒール）にもみえるよ。

ファシリテーター　どこからそう思う？

形が似ている！色と形とテカリからそう思った！

a

2 みえていることに意味づけ（解釈）をし、物語を創造していく。

この2人、**喧嘩**しているような・・・。右の人が口を大きく開けている。手を突き出している。

トラのかぶりもので仮装している人が2人いる。

ロウソクの刺さった**ケーキ**やワインボトルがあるから、**誕生日パーティー**だよ！

じゃあ、ケーキの取り合いで喧嘩になっているんだ！

ファシリテーター　描かれいてる形や筆致の激しさから、二人の"関係性""感情"、"シチュエーション"について考えてくれたんだね！

b

a_ 清水九兵衛《MASK-81》1988年
b_ 齋藤眞成《二人》1985年
c_ 吉原英雄《彼女は空に》1968年

3 話し、聴き合うことを通じて、多様な発見や解釈があることを理解し、それらを掛け合わせることで、更に気づきや意味づけ（解釈）を深めていく。

女の人のように見えるけど、頭がないよ。

頭の部分から、虹が**ビーム**みたいに出ているよ。

え！？逆で突き刺さっているんじゃない？

おへそがないから、生きてない**マネキン**なんじゃない？

ファシリテーター　虹の話を聞いて、他の人はそこからどう思う？

出ているか、刺さっているかわからないけど、すごい**エネルギー**があるように感じる。

よくみたら、虹の青の上に、ジリジリって焦げたみたいな跡が…。

c

関係者コメント

実物の作品を目の前にし、正しいひとつの解釈を探し出すのではなく、美術との関わり方のヒントを得ながら、友達との交流を通してその関わりが深まっていく体験をしてもらうことができました。今まで子どもたちの創造性を育むような新しい挑戦や、他教科の先生たちとの協働や連携もできていませんでしたが、今後はenocoの対話型鑑賞プログラムに参加しつつ、授業では作品鑑賞を通して美術史にも言及し、人間がどんな絵を描いてきたか、どのように表現は広がりをもってきたか、子どもたちと考えていきたいと思います。またenocoの実践を多くの先生たちに紹介したいです。

●橋本滋先生／豊中市立小曽根小学校図画工作科教員（コレクション・キャラバン実施校）

対話型鑑賞によって培われる様々な力は、美術だけでなく、他教科での学びや日常生活においても役立ちます。その点で、enocoのプログラムの教育的意義は高いといえます。しかし、実物作品に触れ、対話するというこの体験が、子どもたちにとって「一度きりの珍しい出来事」で終わってしまうのはあまりに勿体ない。体験をいかに「学び」として定着させるかという点をプログラムの目的として組み込み、さらに内容を工夫する余地はありそうです。同時に、学校との中長期的な連携や教員との協働の形を模索していくことも重要なのではないでしょうか。

●京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター

対話型鑑賞は複数人（多視点）で作品を再検証する場となるので、毎回、作品調査やコンディションチェックする時とは違った新鮮な発見と驚きがあります。作品に付随する事実（情報）を一度白紙にした状態で作品と対峙することで、その場にいる人たちと質感、素材、モチーフなどを細部まで確認し、共有し、「そこからどう思う？」を繰り返し、単なる印象や感想にとどまらない、作品そのものの本質を探るような鑑賞体験となります。ラーニングプログラムとしては勿論、学芸員が作品と関わる上で新たな視点を獲得する場としても続けていきたい事業です。

●高橋真理子／enoco企画部門 学芸員

やってみて生まれた、新たな可能性や効果、動きとは…？

他教科などへの応用

教育現場で取り組みが始まっているアクティブラーニング（生徒が能動的に学ぶことができる学習方法）として、美術だけでなく他教科にも幅広く応用でき、言語・コミュニケーション能力の向上にも効果がある、という新たな可能性の発見。

鑑賞の可能性をひらく

会場内での対話をOKとするコレクション展「おしゃべり美術館」では、親子連れなど美術館には行きにくい層、対話型鑑賞に取り組んでいる（取り組もうとする）文化施設職員や教員等にも機会をひらき、鑑賞のあり方についてさらに考察を深めている。

ネットワークの形成

対話型鑑賞の企画やファシリテーションの学習・実践の場を求めているプレイヤー（enocoポッセ、教員、美術館等の教育普及担当、アーティストなど）がenocoに集まり、情報交換や練習の場が生まれている。

enocoのリソースをつかい、活動する人に並走する

enocoはこれらの取り組みやノウハウを、enocoだけの「コレクションの活用形」として囲い込むのではなく、様々な試みを行なう方々に向けたオープンソースにするとともに、コレクションの貸出も積極的に行なっています。クリエイティブな活動を行なう方々に並走することも、enocoの大きなミッションのひとつ。皆さんとともに協働できる機会をこれからもつくっていきたいと考えています。

ー大阪府20世紀美術コレクションの貸出を行っていますー

美術館や文化施設のほか、公共施設や病院、大学、ホテル、民間企業のエントランス等での展示を通して、より多くの様々な方に大阪府所蔵の美術作品に親しんでいただけるよう、コレクションの貸出を行っています。教育や人材育成の場において、実物の作品を用いた対話型鑑賞等のプログラムにもご活用いただけます。詳細はenocoまでご相談ください。

※レンタル料は無料です（梱包作業費、運送費、保険料等の実費は借主負担。またコーディネートや対話型鑑賞等の出張が必要な場合は、別途企画人件費がかかります）。

P.10でも対話型鑑賞の様子を紹介しています→→→

エキシビションカレンダー　2020年1月 - 6月
exhibition calendar

月	会期	展覧会名	ルーム
1	17(金) - 2/8(土)	大阪府20世紀美術コレクション展『ココロヲウツス』	[ルーム4]
	24(金) - 2/15(土)	コーポレート・アート・コレクション第2回「なにわの企業が集めた絵画の物語」展	[ルーム1]
2	11(火) - 16(日)	第23回サカナヘンノヒトタチ展	[ルーム4]
	18(火) - 23(日)	第43回帝塚山学院小学校美術展	[ルーム1,2,3]
	21(金) - 3/4(水)	大阪市現代芸術創造事業 Breaker Project：花岡伸宏 展覧会(仮)	[ルーム4]
	28(金) - 3/15(日)	大阪府20世紀美術コレクション展「須田剋太」(仮)	[ルーム1,2]
3	12(木) - 28(土)	「enocoの学校」こどもアート学科作品展(仮)	[ルーム4]
	24(火) - 29(日)	堀内粋 個展(ドローイング)	[ルーム3]
4	7(火) - 12(日)	糸井洋一展	[ルーム2]
	28(火) - 5/3(日)	AFTERMATH	[ルーム2]
	28(火) - 5/3(日)	あとりえお作品展	[ルーム4]
5	5(火) - 10(日)	NEXTA'20	[ルーム1,2,4]
	5(火) - 10(日)	足立あゆみ個展『Line 線(仮)』	[ルーム3]
	12(火) - 17(日)	第4回 府友会写真展	[ルーム3]
	19(火) - 24(日)	25周年記念 アートムーブコンクール展・大賞作家展・水都の風	[ルーム1,2,3,4]
	26(火) - 31(日)	京都造形芸術大学通信部大阪クラブ絵画展	[ルーム1,2,3]
	26(火) - 31(日)	大畠澪 水墨画個展「一期一会」	[ルーム4(A)]
	26(火) - 31(日)	29th TSUKUSHI season2-4	[ルーム4(B)]
6	9(火) - 14(日)	第27回 関西水彩画会会員展	[ルーム1]
	16(火) - 21(日)	FoToスクエア＆P7写真展	[ルーム1]
	23(火) - 28(日)	FOUR展	[ルーム1]

展覧会によってオープン時間が異なります　くわしくはWebサイトをご覧ください　www.enokojima-art.jp
また主催者の都合により変更・中止となる場合があります

PICK UP

大阪府20世紀美術コレクション展　ココロヲウツス

enocoでは、コレクションの魅力をより多くの人々に知っていただくこと、またコレクションの活用と展示の可能性を探ることの二つを目的として、昨年度から若手アーティストを招いて、新たな展覧会づくりの試みをはじめました。コレクションを収蔵する立場の人間ではなく、その枠の外で日々作品を生みだすアーティストという立場の人間の独自の視点と感性を通して、いままでにはない新しいカタチでの展覧会づくりを目指すものです。今回は、大阪を拠点に活躍する写真家、麥生田兵吾(むぎゅうだひょうご)を招聘。麥生田は、「曖昧なものを感じること、確かさを感じること、世界と心を感じること」をテーマに、独自の視点と感性で作品を選び、大阪府の収蔵作品群と自身の作品をともに並べ置き、そこから生まれる作品の不思議なイメージを探ります。また昨年度とは異なるカタチで、大阪府のコレクションの魅力に触れていただけると幸いです。

掲載作品：上前智祐《無題》シルクスクリーン・紙 2007
photo：麥生田兵吾

会　期｜2020年1月17日(金) - 2月8日(土)　月曜休館
時　間｜11:00 - 19:00　入場料｜無料
会　場｜大阪府立江之子島文化芸術創造センター〔enoco〕1F room4
アーティストトーク｜2020年1月26日(日)14:00 - 15:00　入場無料／事前申込不要
ゲスト：大島賛都(アーツサポート関西チーフプロデューサー／学芸員)

enocoでは貸室事業も実施しています。展覧会・会議・教室などにお使いいただけます。詳細はWebへ。

レビュー
review

enoco周辺、館内各所を巡りながら鑑賞する「回遊型」演劇

極東退屈道場 #010公演
『ジャンクション』

(2019年11月21日～11月24日)

撮影：會恵澤

撮影：清水俊洋

11月も下旬というのにまるで春のような暖かな一日に、林慎一郎作・演出の極東退屈道場『ジャンクション』を見に行く。林本人によって「回遊型」と名付けられているこの作品は、会場である江之子島文化芸術創造センター内部の複数の場所、そしてセンター周囲の場所を「回遊」しながら観劇(体験)する形式で、演じられる「場所」の記憶と今日性に思いを巡らせるにはふさわしいものだった。

観客は4つのグループに分かれ、各人ラジオを渡される。そこから流れる「ナビゲーション」を聞きながら「回遊」していく。会場内外の4つの場所でそれぞれ1つのエピソードが演じられ、それぞれのグループで体験するため、作品は合計16のエピソードを持つが、一人の観客が体験できるのはその4分の1に過ぎない。

作品は架空の「ソコハカノマチ」を舞台とし、かつてもしかしたら自然災害によって海底に沈んでしまった街であることを彷彿とさせるが、そこに街の住人や家族が偶然遭遇して数分の会話を交わして行く、「今への立ち戻り」の断片と、この街の成り立ちと消滅を神話的に描く「俯瞰」の断片があるように感じた。つまりこの作品を貫く眼差しは、近未来から観た今と、今から観た過去の両者が交差して、このフィクションを複眼的なものにしている。同時にこの2つの眼差しの交差は、実際に会場周辺を移動するパフォーマンスで体験するこの街の今日性と、例えばそれは高速道路が幾重にも重なり合うジャンクションや、年明けには解体されてしまうという「旧日生病院」の解体現場、あるいは近代大阪の行政の中心であったことの残滓としてのモダニズム建築などだが、それらと掛け合わされて錯綜感のある現実味をもたらしている。

4つのエピソードを体験した後、最後に観客全員で同じパフォーマンス「海底の食卓」を観る。ここではさらに古い時代、近世以前のまだこの地が埋め立てられる以前、この地はそもそも海と小島しかなかったというこの土地の「記憶なき記憶」を今に蘇生させる儀式と、海底に沈んだこの街に残された兄弟4人の父親探しの食卓の風景が演じられていく。観客はこの地の記憶のパフォーマンスと併歩しながら、このすでに失われていると同時に、いつまでもあり続ける「ソコハカノマチ」の想念へと誘われていく。

1つ、注文を出すとすれば、「回遊型」とは言うものの、観客に「回遊」の自由はほとんど与えられてはおらず、私のような還暦をとうに越えた人間には若者の歩くスピードに付いていくのは少々辛く、もう少し気ままにこの記憶の旅を楽しみたいという気持ちも残ったのだが・・。

永田靖　ながた・やすし
大阪大学文学研究科教授。近代演劇史、近現代演劇論。編著や共著に『歌舞伎と革命ロシア』(森話社)、『アジア演劇の近代化―プロセスと伝統』(英語、シュプリンガー)他、訳書に『ポストモダン文化のパフォーマンス』(国文社)他、近編著に『漂流する演劇 ― 維新派のパースペクティブ』(大阪大学出版会)など。

「これまで」のイベント情報
past events

enocoの学校　こどもアート学科
造形コース・しこう実験コース

2019年7月20日〔造形／しこう共通プレ・ワークショップ〕、8月から各コース月1～2回実施中

昨年度からスタートしたenocoの学校 こどもアート学科ですが、今年度は新たに「しこう実験コース」を設け、前年度の造形プログラムを「造形コース」とし、2コース体制で実施しています。
2コース共通のプレ・ワークショップでは、講師の北野諒さん（大阪成蹊短期大学幼児教育学科講師）が取り組んでいる〈イーチコーミング～そのへんに落ちてる面白いモノを拾ってみる～〉を通じて、よりよく思考するコツを学びました。8月からはコースごとに分かれて講座を進めています。造形コースでは前年度から引き続き美術家の小池一馬さんと、新たに野原万里絵さんを講師に迎え、陶土による塑像やステンシルの技法をつかった制作など、造形作品の制作を中心に取り組んでいます。しこう実験コースでは、2013年度に一般社団法人タチョナとenocoが開催した「なんだこれ?サークル」をバージョンアップして実施中。毎回出されるお題に思考を巡らせながら、言語化し、試行し、また考えるを繰り返している受講生たちと講師（と、サポーターの大人たち）。最後にどんな《作品》が出来上がるのか…両コースともに、2020年3月に成果発表を行います。どうぞお楽しみに。

高橋真理子／enoco企画部門

リトケイと味わう島酒 reading bar

2019年9月7日（土）

「enocoの学校」卒業生がポッセとして活動する企画の第一弾として、「リトケイと味わう島酒 reading bar」を開催しました。リトケイこと『離島経済新聞』は、全国約420ある有人離島に暮らす人のためのフリーペーパーで、enocoは大阪の設置ポイントのひとつ。当日は、リトケイ編集長の鯨本あつこさんと、中之島の「街事情」マガジン『島民』編集・発行人の大迫力さんとの対談を開催、1日限定の島酒バーもオープン。会場では、島酒片手に、リトケイの紙面を実際にめくりながら、島を味わうひとときとなりました。
「離島は地域課題も多いからこそ、日本の未来のヒントがたくさんつまっている。島に暮らす人だけでなく、島を思う人というくくりで、関わりをつくっていけたら」と語る鯨本さん。また大迫さんからも「昼間人口がほとんどをしめる都市の中で、土地に愛着を持つための視点の見つけ方」などの提案があり、土地と人のかかわり方について楽しく集う時間となりました。

西本愛／ポッセ

enocoを中心として自律的に活動をするメンバーを「ポッセ」と呼んでいます。今回は、「enocoの学校」卒業生でありポッセの一員である西本さんより、ポッセ企画イベント第一弾のレポートが届きました！

泉州アートサミット2019

2019年10月26日@阪南市立文化センター（サラダホール）

enocoが協力している「泉州アートサミット」。大阪の南部に位置する泉州地域の様々な個人・団体が集まり、市町村の境界をこえ、ジャンルをこえ、広くアートや食、農、祭、自然など、多様な「文化」を軸に泉州一体でまちづくりを考える取り組みです（これまでの経緯は前号特集参照）。
昨年1回目を泉大津市で開催。泉州地域をキャラバンしながら継続することを目標とし、今年は阪南市で2回目を開催しました。そして前回同様、基調講演には平田オリザさんにお越しいただきました。平田さんは、グローバル資本に収奪されることなく地域が自立していくためには、「文化の自己決定能力」、つまり自分たちの誇り・強みとは何かを自分たちで考えていくことが必要と話されました。またそのためには子供たちに「身体的文化資本」（センスや感性、コミュニケーション能力、人種・性差に対する偏見の有無など）を蓄積させるような施策を教育と文化の両分野で連動させることが必要とのことでした。
事例発表・パネルディスカッションでは、泉州において歴史文化、農や食、福祉、まちづくりの分野で活動する団体が登壇し、地域に根付いた豊かな取り組みを紹介いただきました（「enocoの学校」5期卒業生が中心となり岬町で活動中の「ミサキノスパイス」も登壇）。平田さんによると文化施策は市町村連携がしやすい分野であり、サービスの質を上げることができるとのことでした。泉州アートサミットでは、まず行政や分野の境界をこえて、顔が見える「連携」や「ネットワーク形成」を目指していますが、広域での政策連携へとつながる契機にもなればと思います。
今回、平田さんによる地元の子供たち対象の演劇ワークショップのほか、アート＆フードマルシェも開催。また、泉州には弥生遺跡が残っており、弥生時代の歴史と文化を扱う日本唯一の博物館（大阪府立弥生文化博物館）もあります。弥生時代といえば「米つくり」。弥生土器を用いた炊飯体験、おむすびづくりといったお米体験教室も行われました。1回目に比べ、多くの連携先・協力者が集まったのも2回目の成果。次世代の身体的文化資本蓄積の一助となる日となったのではないでしょうか。泉州アートサミットは第3回目の開催を目指して、泉州の文化力をさらに結集させていきます。

高坂玲子／enoco企画部門

泉州アートサミット2019

主催：泉州アートサミット実行委員会（泉大津市教育委員会、泉南市教育委員会、岬町、阪南市教育委員会）
共催：株式会社大阪共立（阪南市立文化センター指定管理者）
協力：泉州・紀北ミュージアムネットワーク（大阪府立弥生文化博物館、岸和田城、岸和田だんじり会館、きしわだ自然資料館、泉南市埋蔵文化財センター）、大阪府（泉州農と緑の総合事務所、公民戦略連携デスク）、幸南食糧株式会社、草竹農園、阪南市連合婦人会、NPO法人阪南まちづくり推進ネット、せんなんかるた普及実行委員会、NPO法人ヒトトヒト、大阪府立江之子島文化芸術創造センター

enocoのひとびと
people

CORAL PARLOR enoco

新商品として、淡路島の生麺を使用した生パスタや、デザートではテイクアウトもできるサクサク濃厚リースタルトやとろっとろパンナコッタ、濃厚コーラルプリンなどが仲間入りする予定です。ただいま販売に向けて準備中。販売開始の際は、ぜひお召しあがりください。よろしくお願いします！（コーラルパーラーエノコ）

那覇から地元大阪に引っ越しました。自転車購入のためenoco近くの「金城サイクル」へ。中国出身のオーナーと中国語で雑談。「沖縄の苗字“きんじょう”ってことは、沖縄にルーツが？」と聞くと、「いえ、金城武が大好きなので」とのこと。つまりキンジョウサイクルではなくカネシロサイクルだったわけです。なんでも思い込みはあかん、と思った次第です。（企画部門 新スタッフ 山本佳奈子）

私事ですが、この冬より出産・育児休暇をいただくことになりました。育児と仕事を両立することが大変な業界と思われがちですが、実はenocoスタッフには子育て真っ只中の者も多く、理解のある職場環境で大助かり。子育もしっかり楽しみつつ、マルチタスクの能力を向上させて戻ってきたいと企んでおりますので、皆さんまたお会いしましょう！（企画部門アートコーディネーター 吉原和音）

大阪府20世紀美術コレクション

この一点！

1974年から2001年にかけて大阪府が収集した「大阪府20世紀美術コレクション」。総数およそ7900点の中から、enocoスタッフのおすすめ作品をご紹介します。

「メンテナンス」
田島直樹（1968-）
1996年／80×150 cm
エッチング、アクアチント、油性インク、手漉き紙

enocoは「大阪府20世紀美術コレクション」を管理・活用し、enocoで開催する企画展示や、学校等への出張型展示＆対話型鑑賞事業「コレクション・キャラバン」など、様々なかたちでの活用を行っています。このコーナーでは、そういった事業の現場の様子を通してコレクションをご紹介します。

今回は、enocoで開催している対話型鑑賞サロン「enocoおしゃべりパーラー」での様子を通して、田島直樹《メンテナンス》をご紹介します。「大阪トリエンナーレ」1997年（版画）の銅賞受賞作品であるこの作品は、サイズが比較的大きいということもあり、学校への出張展示でほぼ毎回登場します。子供たちからの人気も高いこの作品は、描かれているモチーフの細部から物語を想像することや、技法の緻密さに魅入っていく鑑賞者の様子が印象的です。作品の細部までじっくり鑑賞しながら、対話を通して、重層的あるいは多面的な物語を見出していく鑑賞者の声の一部をご紹介します。

高橋 真理子
enoco企画部門

対話型鑑賞サロン「enocoおしゃべりパーラー」

日時：2019年11月16日 場所：コーラルパーラーエノコ
参加者：鑑賞者5名、ファシリテーター1名

鑑賞者：人だと思うけど、右足が長すぎるようにみえる。
ファシリテーター：身体的特徴から人のようにみえたけれど、身体のバランスが悪く感じたということ？
鑑賞者：頭がない？首が見当たらないから位置がおかしい。膝や右肩かもしれない。
鑑賞者：肩の上にクレーンが乗っているようにみえるから、頭がクレーンなのでは？
鑑賞者：左右の足の厚みが違う。手前の足には筋のようなものがあるし、皮膚の質感も違うから若者と老人のよう。
ファシリテーター：皆さん身体のパーツのサイズや状態がバラバラのように違和感を感じている。
鑑賞者：もしかしたら、組み立てている途中なのかもしれない！
ファシリテーター：だとしたら、この人物の大きさはどのぐらい？
鑑賞者：巨人！クレーンと同じサイズの10mぐらい。背景の柵が工事現場の足場。
鑑賞者：私は反対で、人と同じ等身大サイズ。柵がボロボロにみえるから足場だとしたら不安定だと思う。
ファシリテーター：どちらの可能性もありますね。もっと背景や人物も細かくみましょう。
鑑賞者：床は板でできている。
鑑賞者：え！？廃墟のようなコンクリート（ボコボコで水が溜まっている）や、空き地（砂がザラザラした）にみえる。
ファシリテーター：空き地とは、作品のどこからそう思ったの？
鑑賞者：全体のイメージから。労働者階級の人がこき使われていて、窮屈で何も考えられないようなイメージ。そんな人のいる場所だから何もない空き地だと思った。
ファシリテーター：労働者とは、どこからそう思った？
鑑賞者：ズボンがジーンズのような素材の作業着にみえるところから。
鑑賞者：今の話を聞くと、先ほど足場と言っていたものが柵のようにみえてきて、それに囚われているようにみえてきた。本来の自分ではない器に、無理やり合わせられているような窮屈さも感じる。
ファシリテーター：しかし、完全に閉じ込められている状態ではない。そこからどう思う？
鑑賞者：もしかしたら立ち上がれるのに自分自身を縛って気づいていないのかも。
鑑賞者：だって頭がないから考えられないもん！
鑑賞者：でも手前の足だけは、足の甲に筋が入っているから力が入っているようにもみえて、何かしたいという自我の現れかもしれない。

館長の履歴書 Vol.2

Doの仕事。Beのシゴト。

今更と言えば、今更であるが、enocoの館長「甲賀雅章」とは一体何者なのか？そんな疑問を持っている人が、少なくないようだ。ということで、2回の連載で彼の正体を明らかにしてみたい。

「おもろいオッサンであり続けたい。」

大道芸ワールドカップというフェスティバルがスタートしたのは1992年、彼が40歳の時である。それから26年プロデューサーを務め、2017年に辞任する。
この間の約30年、彼はクリエイティブ思考で地域や社会課題を解決することを思考し、実践してきた。中心市街地では多くの計画づくりや事業に携わり、また静岡県の文化政策基本指針や静岡市の総合計画や教育基本計画づくりにも関わってきた。地場産業である家具においてはイタリア人建築家とタッグを組み、ヨーロッパ市場の開拓に挑戦したり、静岡茶の振興にも関わってきた。デザイン専門学校での講師も20年前から始まり、若い時に憧れであった北山創造研究所にもデスクを置き、幾つかの大きなプロジェクトにも参加するようになる。このまま、彼の人生は終息に向かっていくのかと思いきや、転機は60歳になる年に訪れる。その少し前、彼は、自分で60歳リタイヤ計画をたて、東京のアートセラピーの学校に通い、認定試験に合格した。人口6600人の中山間地の町でカフェを営みながらアートセラピストとして,町のご老人や子ども達と絵を描きながら過ごすことを夢見ていたのだ。会社も解散しようと準備を進めていた矢先に、今も継続している川根本町文化会館の事業パートナーの話が舞い込んできた。時を同じくして、enocoの受注が決まる。60年間考えたこともなかった大阪行き。彼の意志とは関係なく、運命はコロコロと面白いように変わっていく。演出家や様々なアーティストと出会い、役者、ダンサーの道も開かれ、大きな舞台や学校公演も経験する。新たなアートフェスのプロデューサーとしてのシゴトも増えていく。甲賀雅章68歳。まだまだ休めないようだ。ちなみに、彼のBeは、「おもろいオッサンであり続けること。」それが彼にとってのCreatorの意味らしい。

甲賀 雅章
enoco館長

オン☆ザ☆レビュー

enoco地下1階の古書店、ON THE BOOKS米田店長によるブックレビュー。アートブック・写真集・デザイン・建築・ファッションからマンガ・音楽・映画・オカルトまで、多彩なラインナップの中から、今の気分をあらわす1冊をご紹介いただきます。

ON THE BAG

今回は本の紹介ではなく、当店のオリジナル商品です。みんな大好きトートバッグと、ちょっとしたお出かけに便利なポーチです。絵描きの河田潤一さんの作品を生地に落とし込んで作りました。こちら生地の段階でプリントをしてから縫製をしていますので、バッグの隅々まで絵がプリントされています。この作り方だとすごくコストがかかるんですが、昔のアパレル経験を生かして縫製は僕がやっていますので、なんとかお求めやすいお値段に抑えられています。ここ最近は縫製工場と化している当店ですが、素敵な本も続々と入荷しています。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

ON THE BOOKS
営業時間：11:00−20:00（月曜日定休）
掲載の商品は店頭・オンラインストアで販売中
www.on-the-books.info

米田 雅明
ON THE BOOKS 店長